
BLEACH - 封印されし者 -

天月 統夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLEACH - 封印されし者 -

【Nコード】

N7879I

【作者名】

天月 統夜

【あらすじ】

これはまだ平子達が隊長だった頃のお話。

愛染達が事件を起こす前に起こった凶悪な事件。

護廷十三隊崩壊の危機！？王属特務までが動く事件へ…！

これは危険すぎるあまりに過去の記録から抹消された物語である。

エピソード

「フンフフン、フン　はあ〜…」
いつも通り静靈廷を見回りにしていた八番隊隊長　京楽春水。

「ん〜…どうやらもう何も無いようだねえ、帰るとしますか、リサちゃん」

ついて行って見回りにしていたのは八番隊副隊長　矢胴丸リサ。

「なら早く帰んで、そろそろ暗いしなあ」

「はいよつと」

自身の隊舎、八番隊の場所へ帰っている途中にふと変な霊圧がした。

「ん…？この霊圧、一つは…山じいじゃないかいコレ！」

「もう一つの霊圧…！異常すぎるわ、行くで！」

霊圧がした一番隊隊舎付近まで近付いた京楽とリサ。

そこで目にしたのは、総隊長　山本元柳斎重國と黒いフードを被った男だった。

「万象一切…灰燼と為せ　流刃若火ツ！！」

凄まじい程の霊圧が降りかかる。

「これは…迂闊に近づけないねえ、リサちゃん下がってなさい」

「わかつとるわ、命が幾つあっても足らん！」

山本総隊長の刀には神々しい程の炎が纏われていた。

「…交渉決裂だな、訳あって今は戦えんが、いずれ…覚えている黒いフードの男は、そう言い残し何処かへ消えた。」

「山じい、これはどういうことだい！？」

山本総隊長は刀を鞘に収めた、その瞬間に京楽は近付いた。

「…事態は火急じゃ！直ちに、隊首会を行う！」

その隊首会が全ての始まりと言ってもよかった。

平穏だった護廷十三隊に、不穏な事件が…！

次回、緊迫した隊首会！恐るべき事件が明かされる！

第一話 やがて語られる事件

隊首会には、十一番隊と十三番隊以外の全隊長格が来ていた。

「なんや、十一番隊はまたサボリか」

「十三番隊は仕方ないとしてな」

五番隊隊長 平子真子、七番隊隊長 愛川羅武はいつも通りの会話をしていた。

しかし、山本総隊長は焦っていた。

「事態は火急である！先日：恐るべき事が発覚した！」

「その恐るべき事：っていうのが、昨日の黒いフードを被っていた男と関係するのかな？」

京楽はふといつも通りの喋り方で話してしまった。

山本総隊長がとつともなく細い目で京楽を睨む。

「や、スンマセン、たださ：昨日の黒いフードを被っていた男が気になってね」

「：先日、黒いフードを被っていた男がワシに接触を求めてきた」

「その男は名を 黒領咲也くろみねさくやと言って、ワシが総隊長になったばかりの時に五番隊隊長をしていた男だ」

その時、四番隊隊長 卯ノ花烈と京楽の顔色が変わった。

「まさか、その人は：牢獄に入っていたはずですが」

「そこは二番隊隊長の四楓院夜一に説明をさせよう」
夜一が少し間をあけて喋りだした。

「確かに、唯一人だけ特別態勢としてある牢獄へ閉じ込めておったが、あるうことか二番隊の誰かが、そやつの内通者だったようじゃ」

「つまり、助けたつちゅーことか：難儀なやつちゃ」

そこで少し声を大きめにして山本総隊長が話し出した。

「やつは護廷十三隊を乗っ取るうとワシに接触してきたのじゃ」

「やつの目的は、王鍵を奪取し、反乱した死神達を連れて自身が王の座につく事じゃー！」

そこで隊長格全員が驚いた素振りを見せた。

「やつは厄介な戦力：まずは護廷十三隊を落とす気じゃ、今までで反乱した死神は数知れず、気を抜かず戦闘配備につくのじゃ！」

「六番隊隊長！七番隊隊長！八番隊隊長！」

「以上三名の隊長は、速やかに戦闘配備！及び二番隊、五番隊、九番隊は護廷十三隊の北門以外にそれぞれついてもらう！北門については、あえてカバーせん！」

そこで夜一が話し出した。

「成程な、内通者が居るとすればおそらく敵がせめてくるのは北門に限られるということじゃな」

「そういうことねえ、そこで敵さんがせめてくれば、残った隊長格がカバーしに行くってことね」

「その通りじゃ、では各人！：全面戦争と行こうじゃないか」

しばらくして、南門についた平子はのんびりとしていた。

「ふわあああ、難儀なやつちゃ、いつまでこんな事続くねん」

「そういうこと言わないで下さいよ：：隊員達に聞こえると、色々と問題になります」

「なんやねん、そーすけ：：だるないんか？」

「そういう問題じゃなくてですね：：ほら、いつ敵が進行してくるかもわからないんですし」

平子と話していたのは、五番隊副隊長の愛染だった。

「しゃあないやんけ、どうせ北門からやる…」

平子は屋根の上でのんびりと寝ころびながら眠たそうに喋っていた。愛染はあまりの事に言葉を無くした。

その時、南門が何かの爆撃で吹っ飛んだ。

「：：！！まさかここに来るとはなあ！」

平子は瞬時に起き上がった。

号令が鳴り響く。

「南門に何者かの敵襲、現在五番隊が交戦中、繰り返します…」
南門を破壊して現れたのは、黒いフードを被った男だった。

手には斬白刀だけを手にしていた。

五番隊隊員達はその男に向かっていくが、すぐさまに斬られていった。

「黒嶺咲也やったか、…お前ら下がってるよ」

平子は直々に前に出て、斬白刀を抜いた。

「一人で来るとはいい度胸やんけ、ここで倒されていけや…！」

平子は黒いフードを被った男に斬りかかった。

しかし、その攻撃は惜しくも避けられ、逆に斬りかかってこられた。

「…ッ！無口なやつぢやな！」

平子と黒いフードの男が斬りあいをしている中で、愛染が黒いフードの男を後ろから斬った。

「ようやったそーすけ！…ってなんやコイツ…！？」

平子と愛染は思わず仰天した。

黒いフードの中には、誰もいなかった。

「どづいう…」

遮るように声が聞こえた。

「遅い…その程度で、隊長格とは笑わせてくれる」

平子は後ろを向いた。

すると、何かの仮面を被った男がいた。

「なんや…その仮面…！？」

黒いフードの男が一瞬で平子の目の前まで来て、斬りかかった。

「まず…」

平子は仮面に驚いていた故に、反応が遅れた。

斬りかかってきた刀を、何者かが刀で止めた。

「…誰だ貴様は！」

「……いつもええとこ取りしに来よるわ」

「九番隊隊長、六車拳西だ！」

次回、平子&六車のタッグ！？仮面の男とは一体…！

第二話 仮面の男…！

「こりゃ虚の仮面か！？この霊圧…お前が何者だ！」

「なんや、来る前にわかつとけや…まずコイツとっ捕まえるで！」

平子と六車に巻き込まれない為か、愛染は少し後方へ下がりました。

「隊長格二人か、その程度で足りると思っっているのか？」

その時、号令が再度鳴り響いた。

「北門に何者かの敵襲、繰り返します、北門に…」

六車が青筋をたてて言った。

「どういうことだ…！？敵はまだいるのかよ！」

そこで仮面の男が改めて構えだした。

「なんや、この霊圧…！」

「何かする暇を与える余裕なんざねえ！」

六車が斬魄刀を前に突き出した。

「吹っ飛ばせ、断地風！」

地面ごと風圧で吹き飛び、辺りは煙で見えなくなった。

「ふー…やりすぎっちゃやりすぎや」

「……何も見えなくなっちゃまったな…」

煙がはれて、仮面の男の顔が見えた。

すると、仮面は無くなっていた。

「！？…仮面なくなつとるやんけ！」

「結局コイツは無傷かよ…！」

「…成程、仮面の保持時間がまだ短いか」

「お前…知らん顔や、お前が黒嶺咲也か？」

「……いずれまた会おう、隊長よ！」

そう言い残し、仮面の男は消えた。

「アカン、逃げられてしもた…そーすけ！今の敵の情報、少しでも総隊長に伝えに行つてくれ！」

「わかりました」

そう言つて、愛染は一番隊隊舎へ向かった。

……場面は変わり、北門。

「フー、間に合つたつスねえ……」

「どうせ敵はここにしか来んじやろうと、はつておいて正解じゃつたな」

北門の襲撃には、二番隊隊長である夜一と同隊三席の浦原が立ちあつていた。

北門を襲撃したのは、また一人の黒いフードを被つた男だった。

「さて、お主一人で来るとは…唯一、ここを薄くしとつたんじゃがのお」

「まず名乗つてもらいましようか　フードを被つたままじゃ顔もわからないつスからねえ」

浦原はそう言い、斬魄刀を抜いた。

その瞬間に黒いフードを被つた男が突つ込んできた。

「こりゃあ…血気盛んですねえ」

浦原は斬りかかってきたフードの男の攻撃を少しの動きで避けて、逆にフードを手で落とした。

「　　虚の仮面……」

「こやつ…何者じゃ？」

仮面の男が二人…！？

次回、最悪の事態が起こる…！？

第三話 やがて明かされる真実

「啼け、紅姫！」

斬魄刀を解放した浦原、その霊圧は既に隊長格程だった。

「とりあえずとっ捕まえましょうか それから蛆虫の巢での尋問ですねぇ」

「うむ、こやつ…大層な霊圧じゃ、気を抜くでないぞ」

同時刻、山本総隊長に愛染副隊長が敵の情報を伝えにいこうとしている最中。

「愛染様」

「…要か、どうした？」

愛染に接触したのは、九番隊の東仙だった。

「六車隊長と平子隊長が敵と交戦したようですが、敵のあの霊圧…」

「そうだね、あれは虚化だ なぜ習得しているのかは定かでないが…」

この事件は非常に厄介なことになりそうだ

「どうなさるのですか、このままでは…護廷十三隊に愛染様の陰謀が見つかる場合が！」

「しばらくはおとなしくしていよう、今はこの事態をどうにかしなければいけない…それからは鏡花水月でどうにでもなるさ」

それからしばらくして、場面は浦原達に戻る。

「フー、参ったっスねぇ、逃げられちゃったっスねぇ…何の目的だったんでしょ」

「あやつは黒嶺とやらではなかったようじゃな、ひとまず敵の目的を知る為に、総隊長のところへワシは行く」

仮面の男を追い払った浦原と夜一、しかし本来の目的の拘束は果たせなかった。

またしばらくして、山本総隊長と愛染副隊長が出会う。

「山本総隊長、敵の情報についての連絡です」

「敵は平子隊長と六車隊長と交戦しましたが、結局逃げられてしまいました」

「敵は：斬魄刀を所持し、虚のような仮面をつけていました」

山本総隊長は、ただ黙々と聞いていた。

それからただ一言だけ発した。

「黒嶺はおそらく、護廷十三隊の実力を少しずつ図るつもりなのじゃろう：いずれ全戦力を持って護廷十三隊に攻め入ることであろう、引き続き警備にあたれと平子隊長に伝えてくれるかの」
愛染は少し間をあげて言った。

「：了解しました」

場面は変わって、謎の男の会話。

「：そうか、隊長格といえどそれなら敵にはならんだろう」

「ククク：いよいよだ、護廷十三隊を落とし：続いて王族を落とし、我が王の座につくまで」

「いいか！これから全戦力を持って護廷十三隊に攻め入る！各人に準備をしると伝える！」

とうとう黒嶺が動く：！？

次回、護廷十三隊全面戦争へ！黒嶺達の圧倒的な力に：！？

第四話 虚達の襲撃

「どうも…嫌な予感がするねえ」

京楽は一人、昔の文庫を調べていた。

膨大な資料の中でも、黒嶺に関する事を調べていたのだ。

黒嶺は元五番隊隊長だった。

誰とも深く関わろうとせず、与えられた仕事はしっかりとこなす。

いざ戦いになればその力は絶大、一時は零番隊への加入を勧められるほどだった。

部下からの信頼も厚く、優しい柄だった。

しかし、ある時を境に黒嶺は変わった。

それは黒嶺先遣隊が虚圏へ行つた時の事だった。

…黒嶺以外の先遣隊は全滅、黒嶺は無傷で帰還しこう言ったという。

「我は王になる」

しばらくして黒嶺は単独で護廷十三隊を襲撃した。

黒嶺は山本総隊長に敗れ、二番隊の中でも特別な牢獄に入ることとなった。

「…黒嶺隊長の事を調べているのか？」

「浮竹…！身体は大丈夫なのかい？」

京楽のところへ来たのは、十三番隊隊長の浮竹だった。

「ああ、今日は少し楽だ、それより」

その言葉を遮るように号令が鳴り響いた。

「緊急事態、何者かの襲撃により護廷十三隊各隊舎が半壊

隊長及び隊員は速やかに戦闘配備について下さい、繰り返します

」

「もうか　　！？早すぎる！」

「行くよ！浮竹、黒嶺を止めないといけないねえ！」

同時刻、五番隊隊舎付近。

「なんやねんこいつら…数が論外や！」

平子達のもとには、大量の虚が現れていた。

「どうということやねん　　どないしてこないに…！」

次々と虚を倒していくが、数は一向に減る気配がなかった。

また同時刻、あらゆる隊舎付近で大量の虚の出現が確認されてきた。

「倒してもキリがねえな！　吹っ飛ばせ、断地風！」

「肉雫？　　皆さんの治療を」

虚達の進行は、ほぼ全ての場所に及んでいた。

その虚達の数は数千万はくだらない　　倒しても倒してもどこからか湧いてくるのであった。

「これは…この数は酷いねえ………」

「黒嶺の仕業か！？…尸魂界にここまでの虚をどうやって…！？」

京楽達もその虚の数を見て驚きを隠しきれなかった。

少し間を空けて京楽は言った。

「　　主犯者を倒すまでキリがなさそうだねえ」

「浮竹！ボクも行ってくるよ、これ以上被害が出ると流石にまずいからね！」

同時刻、愛染と東仙は謎の密会をしていた。

「あの虚達…虚圏からあそこまでの数の虚を……黒嶺…！」

「愛染様…黒嶺という男を始末しにいく許可を！」

「黒嶺は他の隊長に任せるんだ　　いいかい要…君も普通の虚を倒す為に隊に戻れ、私にはする事がある」

そしてしばらくして、愛染が向かった先は流魂街から少し離れた森だった。

「…君が黒嶺か　　私は五番隊副隊長、愛染惣右介という」

「…！…なぜここがわかった」

黒嶺も仮面の男達と同様、黒いフードを被っていた。

「なぜ君が虚化に至っている部下を持っている？」

「貴様何のつもりだ？我に質問する格が自身にあるとうぬぼれているのか？副隊長如きが　　」

「いいかい？私の質問に答えろ、場合によっては私は君に協力する

護廷十三隊を滅ぼす事を」

「…ほう…！！面白いぞ貴様…！」

その同時刻、各隊舎付近で黒いフードを被った者達が目撃されていた。

「…君は死神だねえ、尸魂界をここまでするなんてやってくれるじゃないの」

「全ては黒嶺様の思うがままに…その格好、貴公がかの八番隊隊長京楽殿か　　」

「その通り、詳しいじゃないの！…ちょっと君には聞きたい事があるんだ、ここで捕まってくれないかな？」

「…笑止！私に自ら挑むとは愚かな…！」

「なんや…またお前かいな」

「この前は撤退したが…今回は本気で相手をする、行くぞ…！五番隊隊長！」

「貴様が主犯か？」

「俺はその爺…六番隊隊長に用がある…てめえみたいな坊やには用がねえんだよ」

「よかろう、私を甘く見たことを後悔するが良い！」

「おや また会いましたねえ…相変わらず、趣味の悪い仮面をお持ちで…」

「この前はよくもやってくれたな、仮を返させてもらう」

「流刃若火」

「一番隊隊長…相手にとって不足はない」

「フハハハハ！面白いな、貴様…！愛染と聞いたか、いいだろう…！協力しろ！」

「貴様の知りたい事を知るためにもな…！」

「そろそろ…動く時がきたようだ、俺達も…」

現状で、尸魂界…護廷十三隊は黒嶺の部下達と虚達により半分が崩壊していた。

さらに追い打ちをかけるように 敵の増援がやってくる！？

次回、愛染と黒嶺が影で協力！…更なる虚達の追撃！護廷十三隊崩壊…！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7879i/>

BLEACH - 封印されし者 -

2010年10月13日14時50分発行